

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01251

研究課題名（和文）「ハイジ現象」の国際的伝播とメディア横断的展開についての研究

研究課題名（英文）Study on international propagation and transmedial circulation of the "Heidi phenomenon"

研究代表者

川島 隆（Kawashima, Takashi）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10456808

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：ヨハンナ・シュペーリの小説に由来する「ハイジ」の像は今日、スイスという国を象徴するアイコンとして国際的に流通し、観光産業やキャラクターグッズ産業に利用されている。本研究は、原作小説および数多い翻訳・翻案を超領域的かつメディア横断的にひもとき、伝統的な「アルプスの少女」にまつわるエキゾチシズムとナショナリズムを脱構築するシュペーリの戦略からハイジ像の独自性が生まれていることを示した。この像が喚起する自由さの感覚は、今日世界的な影響力を誇る日本製アニメのような映像化作品にも継承され、読者や視聴者が家父長的なジェンダー体制から逃れて解放感を共有する対抗公共圏を創り出すことに寄与してきたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ポップカルチャーの分野で国際的に流通する「ハイジ」像の起源と広がりを分析することを通じ、文学に由来するコンテンツが異なる言語圏・文化圏へと翻訳される過程で幅広いファン層を巻き込んで成長し、巨大な文化現象を生むに至るモデルケースを提示した。その現象はときにツーリズムを介して地域社会を活性化させ、政治・経済の分野にまで影響を及ぼす。研究成果を社会に還元するため、スイスおよび日本で実施した複数の展覧会は、多くの来館者を集めて好評を博し、各種メディアで報道された。その反響の大きさは、本研究が支援した「ハイジ」関連資料のアーカイブがUNESCO「世界の記憶」に選定されたことから裏づけられる。

研究成果の概要（英文）：The image of "Heidi", originally created by the Swiss writer Johanna Spyri, circulates nowadays internationally as an icon which, while symbolizing Switzerland, activates tourism industry and goes on the market as various character goods. Our research project practiced transnational and -medial readings of not only the original novels but also numerous translations and adaptations, showing that the uniqueness of the figure Heidi emerges from Spyri's writing strategy who deconstructs exorcism and nationalism concerning the representation of the "Girl of the Alps" which has its own tradition. This unique figure with its power to evoke a strong feeling of liberty helped to form alternative public spheres among its recipients who had suffered under dominant patriarchal gender norms, and thus survived and remained the same in its core throughout the long history of uncountable trials of translation and adaptation, e.g. the Japanese animation series which keeps a global influence today.

研究分野：German literature, comparative literature

キーワード：Heidi Johanna Spyri media mix contents tourism Swiss national myth the Alps translation counter public sphere

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

「ハイジ」は現在、世界中でスイスという国を象徴するアイコンとして通用し、観光産業や各種キャラクターグッズ産業に利用されている。アルプスの山の大自然の中で幸せに暮らす少女としての「ハイジ」の名を冠する映像化作品は数多いが、特に日本のTVアニメ『アルプスの少女ハイジ』（1974）に由来するイメージは国際的にきわめて強い影響力を誇り、これまで洋の東西で膨大な数の商品を生み出してきた。

このように、往々にして商業主義と結びつきながら展開している「ハイジ」のイメージがあまりにも巨大になったため、ともすれば原作者の存在は忘れられがちだった。そもそも原作が存在するとは知らない人も多く、「まったく無名だった原作をアニメが有名にした」という定型句を当てはめようとする人すらいる。しかし、こと「ハイジ」に関しては、それは当てはまらない。スイス人作家ヨハンナ・シュペーリ（1827-1901）の長編小説『ハイジの修業時代と遍歴時代』（1880）と『ハイジは習ったことを役立てる』（1881）は、ドイツでの刊行後まもなく爆発的な売れ行きを見せ、フランス語や英語に訳されたのを皮切りに国際的ベストセラーになった。今ではアラビア語やヘブライ語、点字やエスペラントなどを含む約70の言語に翻訳され、世界中で読み継がれている。

そのような状況にもかかわらず、従来、ヨハンナ・シュペーリ研究は存在しないも同然だった。小説『ハイジ』二部作が児童文学の古典として児童文学研究の分野でわずかに言及されることはあっても、作者への関心は希薄なままで、数少ない伝記においては、敬虔なキリスト教徒にして夫や子どもへの愛にあふれる良妻賢母といったステレオタイプな人物像が紡がれがちだった。ようやく近年になって、そのような像が虚像であること、シュペーリがキリスト教信仰への懐疑や自らの妻・母としての役割への違和感を抱き、そのために長年にわたり鬱の症状に苦しんだ人であることが明らかになり、その事実を前提にしてシュペーリ文学を読み直す試みが散発的に現れるようになった。小説『ハイジ』にせよ、ただ単に幸せな「アルプスの少女」を描いただけの物語ではない。おじいさんと二人、山小屋で共同生活を営んでいた孤児ハイジは、やがておじいさんから引き離されてドイツの大都市フランクフルトで教育を受け、山に戻って周囲の人々を幸せにする。だが、その過程でハイジは都会生活と教育のストレスから心身を病み、夢遊病を発症して危機的な状況に陥るのだ。その描写には、作者自身の鬱の体験や精神医学的な知識が反映されているのであり、この小説の重層的な構造と奥深さに人々の目が向くようになってきている。

ただ、そうしたシュペーリ再評価の動きに際しては、たとえば『ハイジ』第一部の『修業時代と遍歴時代』というネーミングからも明らかに見て取れる、ドイツの文豪ゲーテからの影響に着目し、いわばゲーテとの関係からシュペーリに箔をつけようとするような発想が目立った。また、そのような研究においては、大々的なメディアミックス展開を行った日本製アニメ『アルプスの少女ハイジ』は俗悪な商業主義の権化として断罪され、攻撃されるのが常だった。

2. 研究の目的

これに対して本研究では、たとえばゲーテのような古典作家の文学は価値が高く、漫画やアニメのようなポップカルチャーの分野のコンテンツは価値が低い、といった発想からひとまず脱却し、数多くの言語やメディアを横断して広がっている「ハイジ現象」を総体として捉えることをめざした。

すべての中心に据えられたのは、ジェンダー論的な視点である。シュペーリは従来、保守的なキリスト教作家と見なされてきたが、『ハイジ』の数年後に執筆した長編小説『ジーナ』（1884）では、女性の大学教育という革新的なテーマを正面から取り上げた。ヨーロッパの少女小説では初めての試みである。このような先進性をそなえた作家だという認識のもとにシュペーリ文学全体を読み直せば、他ならぬハイジをはじめ、主体的に行動する強い少女の像が数多く描かれていることに気づく。これに対し、後世の多くの翻案・続編や映像化作品、とりわけ日本製アニメ『アルプスの少女ハイジ』は、原作のハイジの強さを削ぎ落とし、新たに「かわいい」ハイジ像を提示しようとしてきたと先行研究で指摘されている。この指摘は基本的に正しいと思われるが、ただし、このTVアニメが1970年代から80年代にかけての日本で、特に女性たちのあいだで並外れた人気を獲得しえたのは、そこに原作のハイジがもつ強さや、ハイジの主体的な行動から生まれる解放感が何らかの形で保存されていたからではないだろうか。本研究は、その問いから出発している。

ハイジゆかりの地へ「聖地巡礼」に訪れる人々に着目すると、この問いの重要性がさらに浮き彫りになる。1990年代以降、物語の舞台スイスのマイエンフェルト近郊の地は「ハイジランド」と位置づけられ、観光政策が推進されている。とりわけマイエンフェルトの体験型テーマパーク「ハイジ村」には世界中から多くの人々が訪れるが、そこで大きな比重をなすのが、日本人女性と、中東からのイスラム女性だということ。それらの国や地域は、シュペーリの原作が早くから翻訳され、アニメ版が高い人気を誇っていると同時に、伝統的に家父長制が根強く、女性の地位が相対的に低いとされる場所でもある。そのような国や地域の女性たちが「ハイジ」に強い魅力を感じるのには、原作第一部の冒頭近くで描かれる——そしてアニメ版でも忠実に再現されている——厚着させられていたハイジが山を登る途中、靴や服を次々に脱いで身軽になる場面が象徴しているように、伝統的なジェンダー体制から解放されて自由になるというモチーフが原作とアニメ版に共通して見られるからだと考えられる。

以上のような視座から、私たちはハイジの物語とキャラクターが国際的かつメディア横断的にどのような展開を見せたかを追ひ、さまざまな国と地域で、異文化間の翻訳を経た受容状況の差異にどのような意味があるかを考察することをめざした。

3. 研究の方法

本研究に際しては、シュペーリ文学を全体として読み直す作業に加え、シュペーリと「ハイジ」に関連する資料を収集し、アーカイブ化する作業が重要となる。現存する数少ないシュペーリ本人の手紙や、遺族と出版社とのやり取りなどの原典史料は一つのアーカイブに集約されておらず、整理および保管体制の確立が急務であるのに加え、国際的な「ハイジ現象」を研究対象にする前提として、膨大な数にのぼる翻訳・翻案や映像化作品を言語ごとにリスト化し、可能なかぎり刊行物を収集していく作業が必要になるからである。収集品をもとに国内外で展覧会を企画・実施していくことも、研究成果の社会還元という観点からは欠かせない。

こうして収集した貴重な資料を、主に以下の三つの観点から分析することにした。

3-1. 対抗公共圏

まず第一に、ナンシー・フレイザーの言う「対抗公共圏」の概念を理論的前提に据えた。近代に入って、自由なコミュニケーションが営まれる場としての市民の公共圏は社会の民主化の基盤となったが、それは往々にして、いわゆるハイカルチャーに属する男同士の営みでもあった。それに対して、「女、子ども」がサブカルチャーを話題につなげることができる場が、ともすれば社会の中で抑圧されがちな立場の者が自由に息をつける貴重な空間として、つまりオルタナティブな公共圏として機能してきたことが注目されているのである。もとよりシュペーリ自身が、男性作家を中心とする文壇の高尚な文学に対して、非エリートの民衆にシンプルな娯楽を提供する「民衆文学」の書き手としての自覚を強く持っていた。彼女は基本的に老若男女すべてに向けて書いていたが、『ハイジ』をはじめとする彼女の小説の読者は、19世紀の刊行当時から今日に至るまで女性と子どもが主体だった。

したがって、さまざまな国と地域で翻訳・翻案された『ハイジ』がそのつど新たな読者を獲得していった経緯を追ひ、そこで読者同士がどのようなコミュニケーションを営んでいたかに着目すれば、文字どおりの「民衆文化」としてのポップカルチャーを足がかりとして生成していた目立たない小さな公共圏の数々を発見し、それがどのような解放的な機能を果たしていたかを浮き彫りにすることができるはずだと私たちは考えた。

3-2. ナショナル・イメージ

もう一つの着眼点は、国民国家のナショナリズムという大きな物語の周縁で紡がれるナショナル・イメージの役割である。先に述べたように、「ハイジ」は今日、スイスという国家を象徴する代表的なイメージにまで成長しており、スイス政府はこれを観光産業の促進のために最大限利用するに至っている。しかしその一方で、スイス人は自国が「ハイジの国」と呼ばれるのを嫌い、スイスにはもっと別の顔があると主張しがちだとされる。ここには、一つの国民国家のイメージの中核をなす像がナショナリズムの中心からは外れているという逆説的な現象が認められる。

ここで、19世紀のドイツ語圏でナショナリズムが形成されるにあたって重要な役割を果たした「村物語」という文学ジャンルを視野に入れたい。これは1840年代から流行した、貧困に苦しむ農村部の現実をつぶさに描くリアリズム文学の一潮流であるが、読者に「郷土＝ドイツ」のイメージを共有させることによって、ドイツ・ナショナリズムの基盤を作った。しかし、1871年の国民国家ドイツの成立以降、ナショナリズムは国家の制度に回収され、「郷土」は排外主義的な右翼のスローガンに変化していく。

シュペーリの『ハイジ』は村物語の系譜に連なる小説であり、異郷の地で故郷の山を懐かしむ主人公ハイジが患うホームシックというモチーフを通じ、強烈な「郷土」への愛慕を表現した作品でもある。村物語の伝統という観点から「ハイジ」にまつわる諸現象を検討すれば、そもそもナショナル・イメージとは何か、どのような役割を果たすものであるかを考えるうえで、有益な示唆が得られる。

3-3. コンテンツ・ツーリズム

さらに、近年の観光学分野において脚光を浴びる「コンテンツ・ツーリズム」の概念を分析の軸の一つとした。メディアミックスが常態化した近年の娯楽産業においては、あるコンテンツに関連づけられた現実の土地（いわゆる「聖地」）への関心がインターネットを介してファンのあいだで共有された結果、しばしばツーリズムが誘発される。山村高淑とフィリップ・シートンはこれを「コンテンツ・ツーリズム」と呼び、それがもたらす地域振興やコミュニケーションの活性化に注目した。「ハイジ」をめぐる上述の現象はこの種のツーリズムの原型にほかならず、その歴史的な発展を跡づけ、現在の状況を調査し、今後の展開を予想することが、とりわけ重要な課題となる。

ハイジ・ツーリズムの中心地はマイエンフェルトの「ハイジ村」である。フィールドワークによって当地の観光産業の動向や地域住民との関わりを調査することで、特定のコンテンツに端を発するツーリズムが地域社会にいかなるインパクトを与えうるかが詳らかになる。

4. 研究成果

マイエンフェルトでの調査は今も進行中であるが、現時点ですでに興味深い知見が得られている。コロナ禍によって観光業が事実上停止した時期を除けば、引き続き世界中から大勢の観光客が訪れる「ハイジ村」は現在も拡大中で、従来あった「ハイジの冬の家」に加えて、山の牧場にある「ハイジの山小屋」のレプリカが山麓に作られ、「ハイジの学校」や「ペーターの家」など新しい施設も建設され、19世紀のスイスの山の暮らしを追体験できるテーマパークとしての体裁が整いつつある。興味深いのは、現実の風景に日本製アニメの要素が入り込み、新たな景色を誕生させている点である。たとえば近年、「ハイジの山小屋」の背後に三本のモミの木が新たに植えられた。アニメの作中に登場する山小屋の背後には三本の大きなモミの木が立っており、それと同じ風景が将来的には現出することが期待されているのである。コンテンツが現実を模倣するだけでなく、現実がコンテンツを模倣することで両者が接近していくという現象がここには見られる。

スイスが誇る名優ブルーノ・ガンツがハイジのおじいさんを演じたことで話題を呼んだ映画『ハイジ アルプスの物語』(2015)は、上記のようなハイジ・ツーリズムを後押しするという意味では、ある種の国策映画とも言える。そのようにして「ハイジ」のイメージが公式化される一方で、各種キャラクターグッズが巷にあふれ、TVやウェブや街頭の広告にひっきりなしに「アルプスの少女」が姿を現す商業主義的な状況に違和感を表明する人も多い。ステレオタイプな像を徹底的にパロディ化した映画『マッド・ハイジ』(2022)がクラウドファンディングの手法で制作され、成功を収めたことも、同じ違和感から生じた現象にほかならない。

現在のスイスのナショナル・イメージは、このような矛盾と軋轢をはらみつつ展開している。その一筋縄ではいかない性格は、先に述べたようにドイツ語圏で「郷土」のイメージを創り出した文学ジャンルである村物語にも、出発点からすでに内包されていた。連作短編『シュヴァルトヴァルトの村物語』(1843~54)でこのジャンルを創始した作家ベルトルト・アウエルバッハは、ユダヤ人としての出自から、やがて生まれるべき統一国家ドイツが多様性を包摂する国家となることに期待を寄せていたが、現実建国されたドイツ帝国においてナショナリズムが排他的なイデオロギーに回収されていくのを目のあたりにし、激しく幻滅した。ゆえに、晩年のアウエルバッハは「国民文学」よりも「世界文学」を重視するようになる。その過程は、村物語を継承した作家ヨハンナ・シュペーリの『ハイジ』が、スイスの「郷土」を濃密に描きながら文字どおりの世界文学に成長していった過程と相似形をなしている。20世紀に入ってから、ナチスが台頭する時代のスイスで推進されたナショナリズム運動「精神的国土防衛」の文脈で、多言語国家スイスの多様性こそがスイスの唯一無二の価値をナショナリストティックに主張する論拠として引き合いに出されるというアンビヴァレントな事態が起こった。その際、矛盾や対立を架橋するものとして動員されたのが、スイス人の魂の「郷土」たるスイス・アルプスのイメージだった。それだけに、戦後作家たちがスイス建国神話の脱構築を試みた際に、伝統的なアルプス表象を崩すことが重要な課題となったのだ。

以上のような多種多様な文化現象を統一的に見る視座を獲得したことが、私たちの理論的な基盤づくりの成果である。これを前提としたシュペーリ文学の読み直しは、刺激的な作業となった。19世紀前半の人気作家H・クラウレンの官能小説『ミミリ』(1816)が「アルプスの少女」をもっぱらエキゾチックで性的な他者として描き出し、スイス・アルプスの美しい風景と並んで男性旅行者の視線が向けられる対象としたのに対し、シュペーリは自作の女主人公ハイジから性的な要素を取り除き、スイスの風景に視線を向ける主体として描いた。そこに村物語の伝統がかけ合わされた結果、『ハイジ』はスイス・アルプスをエキゾチックな異国の地として、いわば観光客の目線で表象する一方、これを懐かしい「郷土」としても表現することになった。この小説を読んで主人公に感情移入した読者は、エキゾチックなものを懐かしむという逆説的な心的プロセスを要求される。ここには、①「アルプスの少女」をめぐるエキゾチシズムと、②ナショナリズムの基盤をなす「郷土」概念を両方とも脱構築するような契機がはさまれており、読者がハイジに感じる独特の自由さは、そのように既成概念を次々と打破していく書き方から生まれたものであったことが分かる。

本研究は、言語学的な側面からもシュペーリ研究に大きく寄与した。従来、小説『ハイジ』にはスイス方言がほとんど見られないとされていたが、コーパスにもとづく計量的な分析を行った結果、先行研究の想定をはるかに上回る量のスイス方言的な要素が『ハイジ』には含まれていることが明らかになったのである。この発見をどのように作品解釈にフィードバックしていくかは、今後の研究の課題である。

上記以外では、日本における「ハイジ」受容史の研究が特筆すべき収穫を上げた。1920年(大正9年)に野上彌生子による日本語訳『ハイヂ』が刊行されて以来、この物語が日本で高い人気を誇り、特に第二次世界大戦後に無数の翻訳・翻案が流通するようになったことは先行研究でも知られていたが、戦前の日本での受容状況には従来ほとんど光があたり、わずかに、登場人物名を日本語化することで日本の読者に親しみを与えようとした——結果的にはあまり成功しなかった——試みとして『楓物語』(1925)が挙げられるのみであった。それに対して私たちは、『少女の友』をはじめとする少女雑誌が日本における初期の「ハイジ」受容の媒体であったことを明らかにした。

その最初の例は、1924年から翌年にかけて『少女の友』に連載された深水正策訳『少女小説

アルプスの少女』である。それ以来、この小説はもっぱら少女向けのもので日本では理解されるようになり、『アルプスの少女』という訳題が広く定着した。当時の少女雑誌はきわめて視覚的な要素の強いメディアであり、多くの図版が掲載されるのが特徴だった。松本かつら、露谷虹児、中原淳一といった時代を代表する挿絵画家たちがハイジのイラストを手がけている。

当時の少女雑誌は、吉屋信子の小説に典型的に見られるような、少女同士の強い絆をモチーフとして強く打ち出した。それはしばしば恋愛に近いものとして描かれ、**sister**の頭文字を取って「エス」という隠語で呼ばれた。ハイジの物語が少女雑誌に掲載される際には、そのような独特の少女文化を背景に、登場人物のうちハイジの同性の友人クララに光があたり、二人の少女同士の友愛が強調された。当時の少女雑誌は巻末の通信欄が非常に充実しており、読者と編集部、あるいは読者間のコミュニケーションが活発に行われていたが、『アルプスの少女』の読者も例外ではなく、数多くの感想ハガキが取り交わされた。そこでは、「かわいい」「妹にしたい」「頼りたい」といった熱狂的な感想が並んでおり、読者がイラスト（担当者不明。当時一世を風靡した高島華宵の影響が窺える画風）を通じてハイジをもっぱら「かわいい」キャラクターとして受け取ったこと、そしてハイジとクララの友愛に強く感情移入しながら読んでいたことが読み取れる。

少女雑誌の「エス」の文化が、はたして家父長的なジェンダー体制に対するオルタナティブの意味合いを持ちえたのか、それとも少女たちが最終的に異性愛の秩序に組み込まれて「良妻賢母」になるための準備段階にすぎなかったのかについては諸説あるが、ハイジの物語への感想からは、読者がこの物語に何らかの解放的なモメントを見ていたことが窺える。少女雑誌への投書という経路を通じ、そこには目立たない小さな公共圏がいくつも生まれていたのであり、ハイジの物語はその意味での対抗公共圏を生み出す引き金になっていたのだと考えることができる。少女雑誌が衰退した第二次世界大戦戦後の日本では、異性の登場人物であるヤギ飼いペーターの地位が目に見えて向上し、「ハイジとクララの物語」よりも「ハイジとペーターの物語」として受け取られる傾向が強まっていくが、「かわいい」と同時に強さと自由さを感じさせるキャラクターとしてのハイジの特性は、（演出を手がけた高畑勲自らがペーターの地位を高めたと語る）TVアニメ『アルプスの少女ハイジ』にも受け継がれていく。

以上の研究成果を論文や著書、学会発表の形で世に問うのと並行して、先に述べたように、私たちは展覧会や一般向けの講演会などの企画を通じて社会にフィードバックすることにも積極的に取り組んだ。特に、2017年に世を去ったハイジ関連資料のコレクター桜井利和氏の膨大な遺品（以下「桜井コレクション」）を整理し、アーカイブ化することに力を注いだ。

その成果としてまず特筆すべきは、2019年7月から10月にかけてスイス国立博物館で実施された「日本のハイジ展」である。ヨーロッパでは従来、過度の商業主義の産物として否定的に見られがちだった日本製アニメを再評価し、制作に際してスイスに取材旅行に訪れた高畑勲監督らの「本物」志向と緻密な仕事ぶりに光をあてる内容で、多くの子ども連れの出館者でにぎわった。この展覧会が、他にもないスイス国立博物館で実施されたことには、大きな歴史的意義がある。なお、この展覧会に連動した国際シンポジウムを同年8月末に同館とチューリヒ大学で実施し、アニメ版の制作に携わった小田部羊一（キャラクターデザイン、作画監督）と中島順三（プロデューサー）の両氏を特別ゲストとして招いた。両氏がかつて取材旅行で訪れたマイエンフェルトの「ハイジ村」を再訪する企画は多くの報道機関に取材され、広く報道された。

「日本のハイジ展」が大きな成功を収めたことを受けて、日本でも2022年7月から9月にかけて浜松市美術館で「ハイジ展～あの子の足音がきこえる」が開催された。世界初のハイジ挿絵を1880年に描いたF・W・プファイファーをはじめとする欧米の挿絵画家たちのイラスト原画、松本かつら、露谷虹児、高橋真琴といった戦前戦後の日本の画家たちのイラスト原画、そして1974年の日本製アニメ関連資料までを歴史の流れに沿って配置した展示は大きな好評を博し、コロナ禍の制約にもかかわらず多数の出館者を集めた。

これらの展覧会の成功が各種メディアで報道され、「ハイジ」をめぐる巨大な文化現象の認知度が国際的に向上した結果、2023年5月、チューリヒにある二つのアーカイブ——シュペーリ文書館およびハイジ資料館——が所蔵するハイジ関連資料がUNESCO「世界の記憶」の選定を受けるという快挙を達成した。その申請にあたり、本研究は両アーカイブの所蔵品のうち日本語資料のデータベース化や情報提供などを通じ、所蔵品の文化遺産としての価値の可視化に努めた。

以上の流れは、ポップカルチャーのアイコンである「ハイジ」を研究する学術的プロジェクトが、一般にも強い関心をもって迎えられ、社会的な認知を受けたことの端的な証左である。

それ以外に、在スイスの複数の映像制作者集団と協働し、研究成果を映像作品として国際的に発信する活動にも取り組んだ。まず、スイスの映像アーカイブを利用して一般向け啓蒙動画を作成する非営利団体Filmoの『5 Filmfakten: Heidi』のために、日本のアニメ関連の事項の監修を行った。さらに、2019年のスイス国立博物館の「日本のハイジ展」および国際シンポジウムを取材したNarrative Boutiqueによるドキュメンタリー映画『Heidis Alp-Traum』（2022）の制作にあたり、作中で話される日本語部分のドイツ語翻訳と字幕作成に協力した。この映画は2024年3月、NHKの「BS世界のドキュメンタリー」枠にて、『スイスの象徴になった少女～“ハイジ”はこうして生まれた』の題で日本初放送された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 19件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 21件）

1. 著者名 川島隆、ちばかおり、島口直弥	4. 巻 62
2. 論文標題 ヨハンナ・シュペーリ原作"ハイジ"の視覚化の歴史と現代的意義 浜松市美術館完全オリジナル企画「ハイジ展 - あの子の足音が聞こえる - 」から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 497-517
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川島隆	4. 巻 2024年1月
2. 論文標題 『ハイジ』挿絵の変遷 海外編 / 日本編	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 MOE (特集: ハイジの幸せな暮らし)	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤白	4. 巻 168
2. 論文標題 アルノ・ガイガー『龍の壁のふもとで』 「おじいちゃんはナチじゃなかった」幻想を脱構築する「真正フィクション」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 77-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nishio, Takahiro	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 Die Idee der "Einheit in der Mannigfaltigkeit" im Zeitalter der "Weltliteratur". Zu einer Denkfigur des literarischen Kosmopolitismus im 19. Jahrhundert	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Coincidentia. Zeitschrift fuer europaeische Geistesgeschichte	6. 最初と最後の頁 131-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayanagi, Kazunori	4. 巻 65
2. 論文標題 Bordering on Totalitarianism: Philipp Etter' s Discursive Space	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 296-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psychsoc.2023-B043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山村高淑	4. 巻 40
2. 論文標題 コンテンツツールイズムと自治体 : コンテンツツールイズムの定義・歴史・特性と自治体のかかわり方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 都市とガバナンス	6. 最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamamura, Takayoshi	4. 巻 1
2. 論文標題 Voice as Pop Culture Content: Trans-Media, Transnational, and Cross-Language Consumption of Japanese Voice Actors	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Comics and Graphic Novels - International Perspectives, Education, and Culture	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5772/intechopen.1004043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山村高淑	4. 巻 1
2. 論文標題 コンテンツツールイズムの理論的枠組み構築に向けた若干の試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コンテンツツールイズムと文化遺産	6. 最初と最後の頁 45-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葉柳和則	4. 巻 38
2. 論文標題 全体主義に抗する全体主義？ オーストリア併合前夜におけるフィリップ・エッターの社会-文化構想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 独文学報（大阪大学ドイツ文学会）	6. 最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新本史育	4. 巻 149
2. 論文標題 スイス建国神話を掘り崩す、苦痛から生まれる言語 ヘルマン・ブルガー『人為の母』におけるレトリックの諸相	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文芸研究	6. 最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西尾宇広	4. 巻 164
2. 論文標題 [新刊紹介] Norbert Otto Eke (Hrsg.) im Auftrag des Forum Vormerz Forschung: Vormerz-Handbuch	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 237-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamamura, Takayoshi	4. 巻 1
2. 論文標題 Travelling Grave of the Fireflies	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 War as Entertainment and Contents Tourism in Japan	6. 最初と最後の頁 106-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4324/9781003239970	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamamura, Takayoshi	4. 巻 1
2. 論文標題 War-related narratives and contents tourism during the 'Tokugawa peace'	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 War as Entertainment and Contents Tourism in Japan	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4324/9781003239970	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葉柳和則	4. 巻 8
2. 論文標題 ファシズムとは違うかたちで 教皇の社会教説とフィリップ・エッターの思想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 多文化社会研究 (長崎大学多文化社会学部)	6. 最初と最後の頁 183-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新本史育	4. 巻 54
2. 論文標題 故郷としてのアルプス を掘り崩す ヘルマン・ブルガーの『人為の母』序論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 津田塾大学紀要	6. 最初と最後の頁 195-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大喜祐太	4. 巻 53
2. 論文標題 『ハイジの修行・遍歴時代』のスイスの要素に関する覚書：標準ドイツ語版テキストとの比較を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ドイツ文学研究	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ito, Mashiro	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 Johannes Fried: Die Deutschen. Eine Autobiographie. Aufgezeichnet von Dichtern und Denkern	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Neue Beitræge zur Germanistik	6. 最初と最後の頁 181-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11282/jgg.163.0_181	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川島隆	4. 巻 49962
2. 論文標題 知られざる「ハイジ」の素顔 (知のフロンティア)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都新聞	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Niimoto, Fuminari	4. 巻 5
2. 論文標題 <das junge jakobli laesst den alten jakob gruessen>: Poetik im Dazwischen der Sprache in Friedrich Glausers Kriminalroman "Die Fieberkurve"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Dialogues between Media	6. 最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9783110642056-018	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葉柳和則	4. 巻 36/37
2. 論文標題 カトリック保守主義と精神的国土防衛: スイスの親ナチ運動へのフィリップ・エッターの対応を軸に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 独文学報	6. 最初と最後の頁 27-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawashima, Takashi	4. 巻 1
2. 論文標題 Franz Kafkas Zwei Tiergeschichten und der "juedische Selbsthass" in seiner Zeit	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Akten des JGG-Kulturseminars	6. 最初と最後の頁 315-331
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11282/jggks.1.0_315	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamamura, Takayoshi	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 Contents tourism and creative fandom: the formation process of creative fandom and its transnational expansion in a mixed-media age	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Tourism and Cultural Change	6. 最初と最後の頁 12-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/14766825.2020.1707461	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Graburn, Nelson & Yamamura, Takayoshi	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 Contents tourism: background, context, and future	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Tourism and Cultural Change	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/14766825.2020.1707460	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 新本史音	4. 巻 (1147)
2. 論文標題 ヨーロッパ越境文学の新展開 ドイツ語文学を拡大するハンガリー語からの翻訳者 = 作者たち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 86-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新本史育	4. 巻 (139)
2. 論文標題 列挙、並行、反復 語の複数性と作家の固有性の交差から生まれる創作	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『創作システムとしての翻訳』（日本独文学会研究叢書）	6. 最初と最後の頁 34-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西岡亜紀	4. 巻 (122)
2. 論文標題 京に静かに響く鐘 道成寺の鐘、南蛮寺の鐘にまつわる交流と再生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 263-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西岡亜紀	4. 巻 (14)
2. 論文標題 モスラが来る！ 「発光妖精とモスラ」における文学の運命の隠喩	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中村真一郎手帖	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西尾宇広	4. 巻 (60)
2. 論文標題 鉄道沿いの私的領域 19世紀文学をめぐる覚え書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学	6. 最初と最後の頁 (1-34)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤白	4. 巻 18(2)
2. 論文標題 ナチス時代の「レッシングの図書館」：ヴォルフエンビュッテル・アウグスト公爵図書館は他者に寛容な公共圏を生み出したか (特集 文芸公共圏)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計29件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Kawashima, Takashi
2. 発表標題 Mobilisierung des Heidi-Mythos zur "Geistigen Landesverteidigung" bei Charles Tritten
3. 学会等名 INTERFACEing 2023. Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新本史斉
2. 発表標題 ロシア人の見たスイス / スイスから見たロシア 越境作家ミハイル・シーシキン試論
3. 学会等名 スイス文学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nishio, Takahiro
2. 発表標題 Gewalt der Flut, Macht der Worte. Zur symbolischen Zaehmung der Naturgewalten in der deutschsprachigen Literatur des 19. Jahrhunderts
3. 学会等名 63. Kulturseminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik "Formen der Natur -- Formen der Kultur" (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 西岡亜紀
2. 発表標題 21世紀文学の 冒険 ~いま、表現形式に起こっていること~
3. 学会等名 立命館大学衣笠総合研究機構・国際言語文化研究所土曜講座「21世紀の文学 人間だからできること、人間でないものにできること」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hayanagi, Kazunori
2. 発表標題 Das Alpenbild als ein anderes Europa
3. 学会等名 INTERFACEing 2023. Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 『ハイジ』イラスト化の歴史 浜松市美術館「ハイジ展」から考える
3. 学会等名 スイス文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 世界のハイジ/日本のハイジ
3. 学会等名 浜松市美術館「ハイジ展」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 「ハイジ展」スペシャルギャラリートーク
3. 学会等名 浜松市美術館「ハイジ展」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 『アルプスの少女ハイジ』を読み直す
3. 学会等名 箱根Neighbors Camp(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葉柳和則
2. 発表標題 全体主義に抗する全体主義? 第二次世界大戦勃発期のスイスにおける社会構想
3. 学会等名 日本国際文化学会第21回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 新本史斉
2. 発表標題 スイス神話を掘り崩す、苦痛から生まれる言語 ヘルマン・ブルガー『人為の母』におけるレトリックの諸相
3. 学会等名 スイス文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西岡亜紀
2. 発表標題 「演技のほんとう ほんとうの演技」(企画・司会・ディスカッサント)
3. 学会等名 言語表現メディア研究会 チカラプロジェクト第2回「公開シンポジウム芸のチカラ：演技のほんとう ほんとうの演技」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葉柳和則
2. 発表標題 労働力を呼びよせたのに、やってくるのは人間だ マックス・フリッシュにおける「異他的なもの」の排除
3. 学会等名 日本独文学会西日本支部 第73回総会・研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西岡亜紀
2. 発表標題 フィクションの「私」とは誰か? ~小説から漫画まで~
3. 学会等名 立命館大学 土曜講座
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Niimoto, Fuminari
2. 発表標題 Ins Japanische uebertragen heisst ins Bildliche umsetzen - Uebersetzungsstrategie im Umgang hochrhetorischer Schweizer Literatur der Moderne -
3. 学会等名 Lectures et Rencontres: seminaire "Bild-Uebersetzung", Lausanne University (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤白
2. 発表標題 2. 発表標題：【共通テキスト討論】Sasa Stanisic: Herkunft
3. 学会等名 第74回ドイツ現代文学ゼミナール
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yamamura, Takayoshi
2. 発表標題 Voices that Break Borders: Trans-National and Cross-Language Perspectives of Voice Actors as Idols
3. 学会等名 American Anthropological Association 118th Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamamura, Takayoshi
2. 発表標題 The Creation, Consumption, and Restructuring of a Narrative World and Tourism: Seen from the Boundary-Crossing Consumption of the Heidi Narrative through Contents Tourism
3. 学会等名 Heidi from Japan: Anime, Narratives, and Swiss Receptions (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新本史斉
2. 発表標題 小ささ から生まれる世界文学 20 世紀ドイツ語圏スイスの作家ローベルト・ヴァルザーを読む
3. 学会等名 國學院大學文学部共同研究「スイスの多言語状況とその文化面における影響」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西岡亜紀
2. 発表標題 アニメーションの東西交流～ハイジとマルコの物語（シンポジウム：アニメーションの東西交流～ハイジとマルコの物語）（司会・コーディネーター）
3. 学会等名 日本比較文学会関西支部1月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西岡亜紀
2. 発表標題 日本の紙芝居の100年～今日までの変遷と広がり～
3. 学会等名 Swiss National Museum open seminar（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西岡亜紀
2. 発表標題 アニメーションと教育－『アルプスの少女ハイジ』から世界名作劇場シリーズ、ジブリまで
3. 学会等名 Heidi from Japan: Anime, Narratives, and Swiss Receptions（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西尾宇広
2. 発表標題 「鉄道沿いの村」への帰郷 ベルトルト・アウエルパッハの「村物語」と「美化」の閉域（シンポジウム：国民国家と「村物語」 19世紀後半のドイツ語圏文学およびイタリア文学をめぐる地理的想像力）
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawashima, Takashi
2. 発表標題 Heidi fuer Maedchen. Japanische Uebersetzungen
3. 学会等名 Heidi from Japan: Anime, Narratives, and Swiss Receptions (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 『アルプスの少女ハイジ』演出 ドイツ語吹替版との比較から見えるもの (シンポジウム: アニメーションの東西交流~ハイジとマルコの話)
3. 学会等名 日本比較文学会関西支部1月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 スイスから世界へ 『ハイジ』をめぐる文化現象
3. 学会等名 かわさき市民アカデミー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大喜祐太
2. 発表標題 『ハイジ』のドイツ語はスイス的なのか 親密さを示す方言的要素
3. 学会等名 Heidi from Japan: Anime, Narratives, and Swiss Receptions (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 葉柳和則
2. 発表標題 『月は沈みぬ』チューリヒ上演のインパクト ドイツ語版台本を手がかりに(シンポジウム:時事劇と寓意劇のあいだ Rieser 時代から Waelterlin 時代のチューリヒ劇場)
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ちばかおり
2. 発表標題 日本でアニメーションになった『ハイジ』～日本の制作陣が捉えた19世紀スイスとその表現
3. 学会等名 Heidi from Japan: Anime, Narratives, and Swiss Receptions (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 ブルクハルト・ブリュックナー(著), 服部裕之, 山本啓一, 村井俊哉, 川島隆(訳)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 195
3. 書名 入門 精神医学の歴史	

1. 著者名 森茂起・川口茂雄(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 272
3. 書名 戦いとトラウマのアニメ表象史 「アトム」から「まどか マギカ」以後へ	

1. 著者名 大喜祐太	4. 発行年 2023年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 165
3. 書名 ドイツ語の世界を読む	

1. 著者名 ちば かわり、川島 隆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 144
3. 書名 増補改訂版 図説 アルプスの少女ハイジ 「ハイジ」でよみとく19世紀スイス	

1. 著者名 Alexander Honold, Arne Klawitter (Hg.), Mashiro Ito u.a.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Schwabe	5. 総ページ数 207
3. 書名 Thomas Mann, "Der Tod in Venedig" und die Grenzgaenge des Erzaehlens. Interkulturelle Analysen	

1. 著者名 菅利恵 (編)、西尾宇広 (ほか共著)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 共和国	5. 総ページ数 336
3. 書名 ドイツ語圏のコスモポリタニズム 「よそもの」たちの系譜	

1. 著者名 大宮勸一郎、田中愼（編）、川島隆（ほか共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 ノモスとしての言語	

1. 著者名 フランツ・カフカ（川島隆訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 176
3. 書名 変身	

1. 著者名 ローベルト・ヴァルザー（新本史斉訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 鳥影社	5. 総ページ数 210
3. 書名 詩人の生	

1. 著者名 葉柳和則（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 380
3. 書名 ナチスと闘った劇場	

1. 著者名 中丸禎子、加藤敦子、田中琢三、兼岡理恵（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 359
3. 書名 高畑勲をよむ（西岡亜紀「個を持った少女の憂愁 『おもひでぼろぼろ』 『かくや姫の物語』の時間の表象」を掲載）	

1. 著者名 井出万秀、川島隆（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 ドイツ語と向き合う（大喜祐太「ハイジのドイツ語 そのスイスの要素を探る」を掲載）	

1. 著者名 Yamamura, Takayoshi & Seaton, Philip	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Channel View Publications	5. 総ページ数 249
3. 書名 Contents Tourism and Pop Culture fandom: Transnational Tourist Experiences	

1. 著者名 新本史斉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 鳥影社	5. 総ページ数 400
3. 書名 微笑む言葉、舞い落ちる散文	

1. 著者名 Harm-Peer Zimmermann, Peter O. Buettner & Bernhard Tschofen (Hrsg.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Wehrhahn Verlag	5. 総ページ数 496
3. 書名 Kreuz- und Querzuege: Beitrage zu einer literarischen Anthropologie. Festschrift fuer Alfred Messerli	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Heidiseum - The Heidi Heritage Project https://www.heidiheritage.com/</p> <p>Heidi in Japan https://www.landesmuseum.ch/heidi-in-japan</p> <p>International Symposium "Heidi from Japan" https://www.khist.uzh.ch/de/chairs/ostasien/archiv/eventsarchiv/Heidi.html</p> <p>Heidi in Japan, Yoichi Kotabe in Switzerland https://www.youtube.com/watch?v=d7yEFCVE4NI</p> <p>Heidi: 5 Filmfakten https://www.youtube.com/watch?v=zZEMQAKgUSk</p> <p>Le cauchemar de Heidi / Heidis Alptraum https://narrative.boutique/portfolio/heidis-alptraum-le-cauchemar-de-heidi/</p> <p>『ハイジ』がユネスコ「世界の記憶」に登録 スイスの二つのアーカイブの収蔵資料 https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-05-24-2</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 白 (Ito Mashiro) (50761574)	学習院大学・文学部・准教授 (32606)	
研究分担者	山村 高淑 (Yamamura Takayoshi) (60351376)	北海道大学・観光学高等研究センター・教授 (10101)	
研究分担者	大喜 祐太 (Daigi Yuta) (60804151)	近畿大学・総合社会学部・准教授 (34419)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	葉柳 和則 (Hayanagi Kazunori) (70332856)	長崎大学・多文化社会学部・教授 (17301)	
研究分担者	中島 亜紀 (西岡亜紀) (Nakajima Aki) (70456276)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	西尾 宇広 (Nishio Takahiro) (70781962)	慶應義塾大学・文学部(三田)・准教授 (32612)	
研究分担者	新本 史斉 (Niimoto Fuminari) (80262088)	明治大学・文学部・専任教授 (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 A Journey through 100 years of Heidi	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Heidiseum Lecture Tour Japan 2022	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Heidi from Japan: Anime, Narratives, and Swiss Receptions	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
スイス	Heidi Archiv, Heidiseum Zuerich	Johanna Spyri Archiv	Heididorf Maienfeld
スイス	Heidi Archiv, Heidiseum Zuerich		
スイス	Universitaet Zuerich	Schweizerisches Nationalmuseum	